

2013年総選挙と社会運動

— ブルシはマレーシア社会の何を変えたのか

伊賀 司 神戸大学

すでに篠崎さんからブルシの話で論点を出していただいています。重なる部分もありますが、少し違った観点から考えたいと思います。つまり、社会運動と今回の選挙、あるいは2008年前後からこの5年あまりでマレーシア社会がどう変わったのか、「都市空間の政治」をキーワードに説明したいと思います。

本日の報告は、前回の2008年総選挙以降のマレーシアの政治と社会運動をめぐる三つのクエスチョンをもとにお話ししたいと思います。2008年以降、PRが連合としてかなり定着したり、人びとが街頭に出るようになりました。これらの現象の原因として、マレーシア社会でこの5年あまりのあいだに起こった変化が影響していることを指摘したいと思います。

まずは、この5年間でメディアと市民社会にどのようなことが起こっているのか、統計等を参照しながらお話しします。次に、この5年間で活性化した社会運動のうち、選挙制度改革運動のブルシに注目します。ブルシ運動に注目する理由は、この運動の真似をしたり、似たような運動のかたちをとったりして、さまざまな社会運動あるいは街頭に出る運動が活性化しているからです。そこで、ブルシとはどのような性格をもつ運動なのかについてお話しします。

最後に、ブルシ運動に代表される社会運動はマレーシアの社会の何を変えたのか、あるいは何を変えつつあるのかをお話しします。

■ ポスト・マハティール期の変化を読み解く鍵①

— 7割を超える都市化率

ポスト・マハティール期のマレーシア政治の変化をどのように説明したらよいのでしょうか。私は「都市空間の政治」の拡大から説明できると考えています。まずは現在、20歳代や30歳代にあたる新世代、つまり40歳以下の世代が人口統計的な観点から見て大きく増えていることを指摘する必要があります。

次に「情報化」への注目が重要です。ここで最も重要なポイントは「オンライン・メディアの浸透」ですが、より一般的に言えば、この5年間で人びとが触

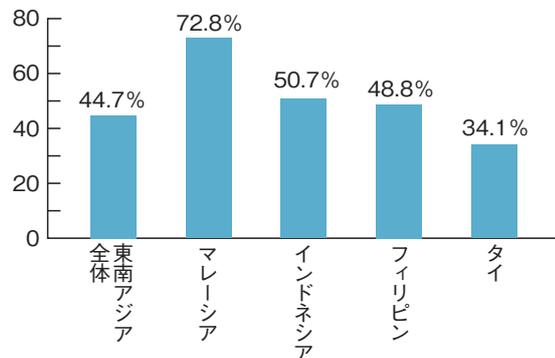
られる情報の選択肢が増えてきたことが指摘できます。こうした社会変化を原因として、社会運動がこの5年間で大きく活性化することになります。

じつは2008年の前回選挙を対象としたJAMSの研究会のとき、すでに私はこうした考え方を披露しています。とくに新世代と情報化で言えば、前回選挙では新世代と「オールタナティブ・メディア」という言い方をしました。因みに、前回選挙で野党が勝ったときにはメディアや学者の間では、「政治的津波」と言われました。しかし私は、前回および今回の選挙で見られるのは、津波というよりおそらく社会に起こっている「地殻変動」、津波のように一過性のものではなくもっと深いところで起こっている地殻変動のようなものであり、これがマレーシアの政治と社会を大きく変化させていると考えています。

先ほど指摘した「都市空間の政治」という点から考えれば、マレーシアという国は都市化率7割を超える都市化が進んでおり、他の東南アジア諸国と比較するとその都市化率の大きさは明らかです。これは資料33を見ていただければ一目瞭然だと思います。

■ ポスト・マハティール期の変化を読み解く鍵② — オンライン・メディアの台頭と統制の破綻

二つ目の「情報化」について言うと、情報の流通における選択肢が拡大しました。先の報告でも何度か言



資料33 都市化人口比率

出所：United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division, 2011年データ。マレーシアはサバ・サラワク含む

及があったように、2000年代のアブドラ・バダウィ政権期以前ごろまでは、マレーシアのメディア統制はかなり強かったのです。政府あるいはBNが、法律や経営権を使ってメディアを支配してきたのですが、それが2000年代からの10年ほどで徐々に崩壊していくというか、ゆるんでくる過程が見られます。

もっとも典型的なのは、政府のメディア統制がカバーできないメディア、つまりオンライン・メディアが現れたことです。それに加えて、今回の選挙では私も1週間だけ選挙前にマレーシアに行きましたが、法律自体が変わっていることもあるにせよ、事実上、従来のメディア統制が都市部を中心にほぼ効かなくなっている状況を観察することができました。

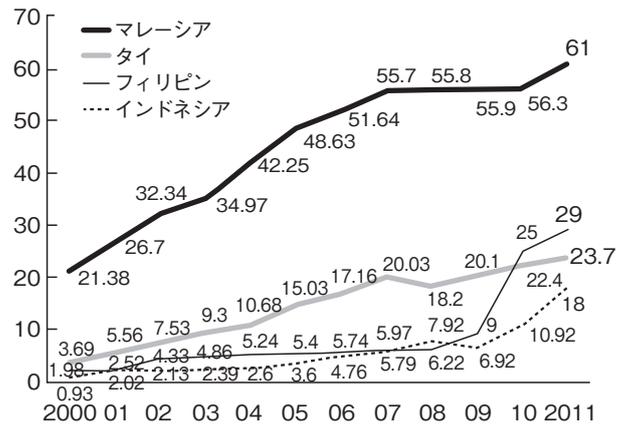
法律面での変化について例を挙げましょう。印刷機・出版物法によって、印刷メディアは従来まで、出版のために免許を毎年更新しなければいけませんでしたが、2012年に政府が印刷機・出版物法の緩和を実施し、出版メディアの毎年の免許更新を要求する規定を廃止し、法の緩和を行いました。

オンライン・メディアの話で言うと、資料34のグラフを見ていただければ一目瞭然かと思えます。東南アジア各国別のネット利用者の割合で言うと、マレーシアは2011年の段階で6割を超えています。

これまでの常識だと、マレーシアにおけるメディア統制は、とくに印刷メディアやテレビなどの放送メディアに対しては、きっちり統制できていました。大手のメディアで言うと「ザ・スター(The Star)」や「NSTP(New Straits Times Press)グループ」は基本的に与党のメディアですが、都市部において今回の選挙でもむしろかったのは、与党系以外の民間のメディアが出てきていることです。非与党系のメディアが同盟を作って報道することが今回の選挙で見られました。

『星洲日報』という華語紙は以前からMCAと近い立場で報道してきましたが、現在ではそれ以外に『東方日報』という華語紙を都市部では入手できます。マレー語紙では『シナル・ハリアン(Sinar Harian)』に注目すべきでしょう。基本的にマレー語の新聞では従来は、『ウトゥサン・マレーシア(Unusan Malaysia)』とか『ブリタ・ハリアン(Berita Harian)』という与党系のメディアが強かったのですが、『シナル・ハリアン』は非与党系のメディア・グループが運営しています。

それから『マレー・メール(Malay Mail)』はもともとNSTPグループでしたが、最近NSTPグループから出て「レッドベリー(Redberry)グループ」に入りまし



資料34 国別ネット利用者の割合
出所: ITU

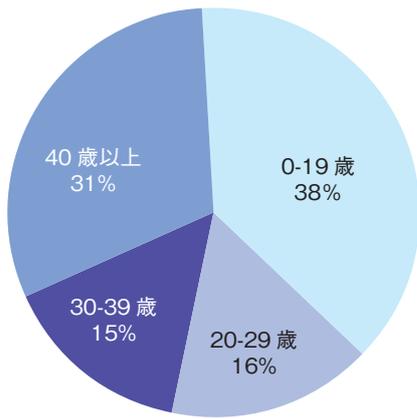
た。タミル語の新聞では『マカル・オーサイ(Makkal Osai)』という与党の影響力の比較的少ない新聞が拡大しています。

今回の選挙では、こうした非与党系のメディア企業が報道協定を結んで選挙報道を行いました。もちろん、従来から言われているように、政府のメディア統制から比較的自由な『ザ・サン(The Sun)』とか「The Edgeグループ」も存在します。野党系のメディアでは、PR州政権が出している『スランゴール・タイムズ(Selangor Times)』という新聞があり、スランゴール州ではかなり広がっています。

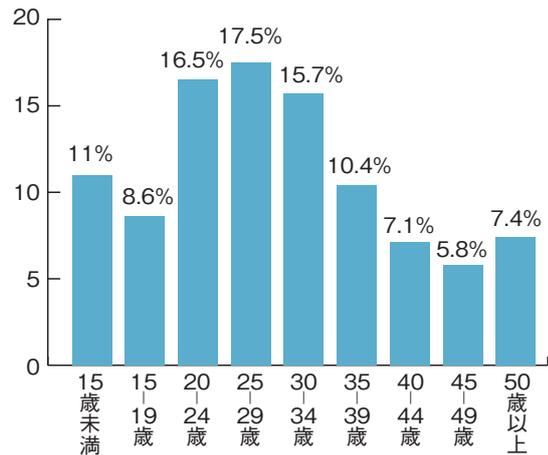
私は今回の選挙前に1週間だけマレーシアに行って、その間にスランゴール州を中心に野党系のチェラマを回りました。かつてならば人々がチェラマにもってくる新聞は『ハラカ(Harakah)』でした。しかし最近気づいたのは、『シナル・ハリアン』をもってチェラマに来ている人がけっこう多いということです。私は、『シナル・ハリアン』が『ウトゥサン・マレーシア』など与党系メディアになりかわって影響力を拡大しているのではないかと見ています。

■ ポスト・マハティール期の変化を読み解く鍵③ —— 40歳以下の新世代の増加

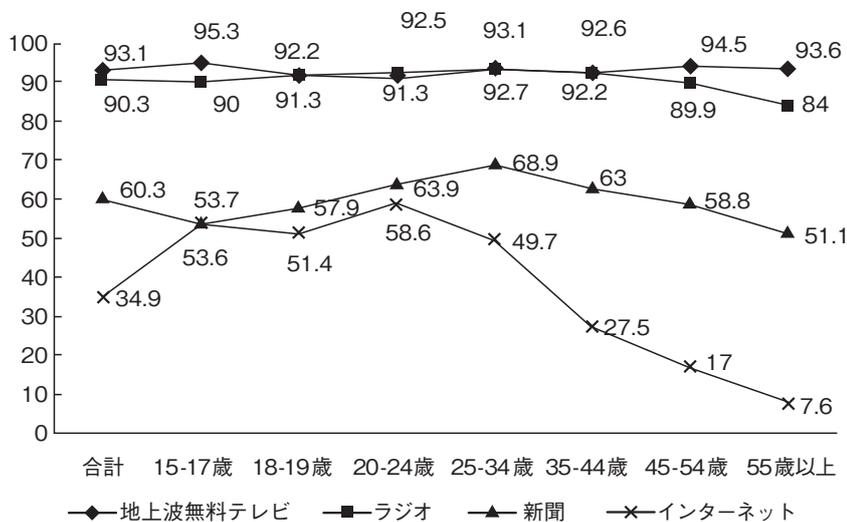
次に新世代の話です。新世代では、「ジェネレーションY世代」とよばれる、1970年代後半から1990年代末あるいは2000年代初めの人びとが台頭しています。こうした人びと、20歳代から30歳代半ばくらいの人々が、今回の選挙の動向を大きく左右したと言われていいます。今回の選挙で初めて投票を行った人の数は約320万といわれていますが、そのかなりの割合がこうしたジェネレーションY世代と言われていいます。とくに21歳から25歳までの若年層が、初めて投票を行



資料35 2013年の世代構成
出所: United State Census Bureau, International Data Base



資料36 ネットユーザーの世代別割合、2011年
出所: SKMM, Household Use of the Internet Survey



資料37 世代別メディアの浸透度
出所: Media Planning Guide Malaysia 2012

なう300万人から320万人の人びとの中核です。そして、この320万人は全体の投票者数の25%を占めるといわれています。投票の結果がジェネレーションY世代の動向に大きく左右されることは明らかでしょう。

マレーシアの人口構成を見ると、資料35のように40歳以下が69%になります。このような若い世代の人は、かなりインターネットを使っています。インターネット・ユーザーの8割は40歳未満の人びとです(資料36)。

資料37は、メディアがどれくらい世代別に浸透しているかを示しているデータです。インターネットが最も浸透しているのは、15歳から35歳前後の世代で、この世代の約5割にはインターネットが浸透しています。この世代がもっともインターネットの影響を受けると言えるでしょう。

■ マレーシア政治の重要な争点を設定した 2008年以降の四つの社会運動

若年層と情報化について説明しましたが、本日のもう一つの論点は社会運動です。社会運動ということでは、今回お話する「ブルシ」があります。これは選挙制度改革運動です。ブルシに限らず、社会運動がマレーシアの重要な争点を設定することが、2008年以降のマレーシア政治で起こりつつあります。

ヒンプナン・ヒジャウ(Himpunan Hijau、緑色集会)という環境問題に関する運動があります。パハン州にレアアースの精製工場を設置することを政府が認可したのですが、レアアース精製の過程で核関連の物質が出ます。レアアース精製工場が引き起こす深刻な環境問題に対してヒンプナン・ヒジャウという反対運動が起こり、かなり大量の人が動員されています。

あるいは、以前ならほとんど問題にならないゲイの問題やジェンダーの問題が、ナショナルなポリティクスのなかでも大きな問題になっています。ジェンダー・ゲイ問題に火をつけたのはセクシャリティ・ムルデカ (Seksualiti Merdeka) という社会運動です。

エスニシティが最重要視される従来の運動とは異なる社会運動がある一方で、2008年以降に大きく注目されたのは、「プルカサ (Perkasa)」というマレー人優先主義を掲げる団体の活動です。今回の選挙で興味深かったのは、マレー人優先主義を掲げるプルカサの代表をBNが支援したことです。クランタン州ではイブラヒム・アリ (Ibrahim Ali) というプルカサの代表を支援する一方、プルカサの副代表である人をBNが直接に候補としてシャーアラム (Shah Alam) の選挙区に立てました。とくにシャーアラムの選挙区は大きくメディアでも取り上げられてBNがサポートしましたが、プルカサの候補者は両方とも落選しました。

このようなことがあって、とくにオンライン上では、こうした民族優先主義、マレー民族優先主義は力をもたないという言説が広がっています。

■ 選挙に対する社会的関心の高まり

—— 監視グループの活性化とメディアへの影響

選挙制度改革に関して言えば、この5年間でブルシによる活動、あるいはそこから派生したような活動がさまざまあります。まず、先ほど篠崎さんからもご指摘いただいた選挙監視グループが存在するようになってきています。選挙監視グループはもともとあったのですが、新しく大規模に活動するようになりました。「プムルハティ (Pemerhati)」と「プマンタウ (Pemantau)」というグループが有名です。選挙教育を行なう団体も出てきています。

社会運動によるメディアへの影響の浸透もあります。選挙制度改革を求める活動家による、メディアの正確な用語使用に対する影響を示す例があります。たとえば「暫定政府 (caretaker government)」という言葉です。選挙が公示されたら、そこから先は正式な政府ではなく、一時的に選挙を管理する暫定政府が存在するという考え方です。従来はこうした用語は、一部の活動家のみが使用していました。しかし、現在、この言葉の使用はメディアでも一般化しつつあります。マレーシアキニを調べてみると、2008年の選挙以前では「暫定政府」という言葉を使ったニュースが15件だったのが、今回の選挙では254件と、一般的になりつつあります。

■ ブルシ運動はなぜ活性化したのか

—— 1.0から2.0への変化と野党との関係

次に選挙制度改革運動のブルシの話に入ります。ブルシが掲げた要求は資料38のとおりです。

とくに重要視されたのは、①「不正行為に取り組むため選挙人名簿を整理」、②「郵便投票の改革」、③「(指先につけて投票済みを確認する)消えないインク導入」です。最初から要求してきたのは①から③、あるいは⑤「全政党に対する自由で公平なメディアへのアクセスの保障」です。

ブルシは、ブルシ1.0とブルシ2.0とに分けることができます。ブルシは2006年にできたのですが、なぜ1.0と2.0とに分けられるかというと、運動を主導する中心的な主体が違うからです。ブルシ1.0のときは野党が運動を主導しました。ブルシ運動は、2008年総選挙前までは、ほぼ野党が中心の運動だったのです。このときのブルシは、2007年にデモを起こして、その翌年の2008年総選挙の結果に影響を与えたと言われています。

ブルシ2.0は2010年11月10日に設立されました。このときは運動の方向性を決める運営委員会から野党を排するかたちで非党派運動を標榜してスタートしました。2回のデモを行っています。とくにブルシ2.0の2011年7月では2万人から3万人規模、2012年のブルシ3.0のデモでは10万人近くの参加者がクアラランプールで出ています。

ブルシは単に社会運動というだけではなく、野党とも密接につながっています。ブルシ1.0はもともと野党が設立したものとされていますが、別の見方をすると、PRはブルシが作ったと言えなくもないのです。

つまり、2001年までは野党はBAという政党連合を作っていたのですが、イスラム国家問題やフドゥ (Huduh) の問題が契機となって野党間協力が崩れました。このときに、これは私が関係者にインタビューをしたときに出てきたことですが、野党がもう一度

資料38 ブルシ運動の8大要求

- ①不正行為に取り組むため選挙人名簿を整理
- ②郵便投票の改革
- ③(指先につけて投票済みを確認する)消えないインク導入
- ④最低21日間の選挙期間をとる
- ⑤全政党に対する自由で公平なメディアへのアクセスを保障
- ⑥(司法制度、反汚職委員会、選挙管理委員会等の)公的制度を強化
- ⑦汚職を取り除く
- ⑧(政党、政治家間の)汚い政治をやめること

集まるときに、どのようなアジェンダをもってくるかということ、イスラム国家の話を持ってきたらDAPとPASはその場で喧嘩してしまう。ですから、野党の人たちは、「民主主義の手続き」論にシフトして協力をしようと言うわけです。その結果がPRであり、ブルシでもあります。

**■ 政府の中途半端な抑圧が
ブルシを活性化し、社会的影響を強める結果に**

ブルシは2006年に公式にスタートし、2007年に大きなデモを起こすことで、2008年選挙の結果にも影響を与えました。2007年のブルシはある意味では成功して、そのあと2008年選挙で野党の議席が大きく拡大しますが、そこで一時的にブルシ運動は停滞してしまいます。

なぜかという、人やメディアなど資源の動員という観点からは、PRがスランゴールやペナンなどの資源の多い州の政権をとったことはプラスですが、マイナス面として、PR指導者が州政権の運営にかかりきりになったため、ブルシ運動は3年間くらい停滞してしまうのです。停滞期を経て、野党ではなく、市民社会、NGOが中心となる運動として再生されるのがブルシ2.0です(資料39)。

なぜブルシがこれほどマレーシア社会に大きなインパクトを与えたのかということ、政府の失敗もあったと考えられます。とくに2011年のブルシ2.0のデモのときに、政府は中途半端な抑圧をしました。ブルシの人びとは黄色のシャツを来て街頭に出て活動しますが、政府はとりあえず黄色のシャツを着ている人を逮捕しました。

ブルシ2.0のデモでは1か月くらい前に「デモを7月9日に行う」と言ったのですが、それ以降、政府はさまざまなかたちで抑圧を進めました。これが逆効果になったことが大きいと思います。抑圧することで1か月間ずっと中途半端に主流メディアにブルシの話が載り続けて、逆にブルシの話題が人びとの頭に強く刷り込まれる過程が2011年に起こりました。

同じような話として、2009年にペラ州で州政権が代わったとき、野党やNGOが中心になって黒い服を着て抗議を行なった「One Black Malaysia」があります。基本的に、デモは平和的なものですが、リーダーなどを捕まえる過程がありました。ほうっておけばそれほど大きな話にならなかったのですが、政府が介入したことで、いろいろなところで人びとがこの話題を認識するようになりました。

資料39 ブルシとブルシ2.0

	公式の設立年	運営主体	要求	デモ
ブルシ	2006年11月23日	野党……5野党と26のNGOが議会内で設立	①消えないインク、 ②郵便投票の廃止、 ③選挙名簿の精査	2007年11月10日のブルシ・デモ
ブルシ2.0	2010年11月10日	NGO……62のNGOによって非党派を標榜して設立	11大要求→8大要求	①2011年7月9日のブルシ2.0デモ ②2012年4月28日のブルシ3.0デモ

結局のところ、政府は中途半端に介入すると人びとの意識をそちらに向けさせてしまうことがわかったので、2013年1月12日にムルデカ・スタジアムで野党が主導する大規模な集会があっても、警察が交通整理して、抑圧的な態度をとりませんでした。このため1月12日のデモは、私がオンライン上で知る限りでは、それほど大きなインパクトを与えたとは思えません。しかし、2013年1月12日のデモと異なり、2011年のブルシ2.0のデモ、2012年のブルシ3.0のデモは、逆説的ですが、政府の抑圧がデモの存在をより強く人々に意識させたと言えます。

**■ 新たな動員構造の形成とグローバル化、
フレーミングの成功を実現したブルシ**

メディアの話で言うと、2007年のブルシやHindurafのデモのときには、オンライン・メディアではブログが主流だったのですが、2010年ころ、ちょうどブルシ2.0が始まるころから、動員のためのメディアはフェイスブックやツイッターに変わってきました(資料40)。

とくに若年層を中心に、新聞を直接読まずにフェイスブックのリンクを通じて主流メディアの情報を得る人びとが拡大しています。中間層の一部には、「メディアは偏向しているからフェイスブックの友だちの情報しか信じない」という人もいます。

動員構造ということでは、ブルシは、とくに1990年代末のレフォルマシ運動と比較してかなり多様化しています。民族が多様化していますし、ジェンダーの面でも「ママ・ブルシ」といってお母さんがブルシ運動に参加していたりします。これもソーシャル・メディアの効果ですが、「アンティ・ブルシ (Aunty Bersih)」といって、元英語教師で退職したおばあさんを、若者たちがおもしろがってフェイスブック上でブルシのヒロインにしてしまうということも見られました。

篠崎さんの報告にもありましたが、グローバル・ブルシといって、グローバル化に対応してブルシ運動が世界各地で展開されています。あるいは、世界各

資料40 ブルシ運動はなぜ活性化したのか？— 動員構造の変化

動員のメディアの変化

2008年時点ではブログであったが、その後2010年頃からフェイスブック、ツイッターへと動員のためのメディアは変化
新聞を直接読まず、フェイスブックのリンクを辿って情報を得る人々の拡大(若年層+一部の中間層)

社会運動参加者の多様化とグローバル化

1990年代末のレフォルマシ運動の参加者の社会的背景……典型は「20歳代から30歳代にかけてのマレー人男性」
ブルシ運動の参加者の社会的背景……①民族の多様化、②ジェンダーと社会階層の多様化(Cf.「ママ・ブルシ」、Aunty Bersih、
反ライナス運動での女性活動家)、③運動参加者のグローバル化(グローバル・ブルシ運動)

グローバル・ブルシ運動、Jom Balik Undi運動

⇒参加者の多様化の背景には運動の「フレーミング」の成功

資料41 ブルシ運動はなぜ活性化したのか？

— フレーミングの成功

「選挙制度改革」— フレーミング(1)

①野党間の合意、②非民族、③投票行為自体に価値を置くマレー
シア人の国民性

「非党派」— フレーミング(2)

党派対立に倦んだ若年層を中心に拡大

黄色のシンボル — フレーミング(3)

「マレーシア・ナショナリズム」のフレーム

→グローバル・ブルシ

地に散らばった人びとに対して、投票のためにマレー
シアに帰りましょうという「Jom Balik Undi」という
運動も始まっています。

マレーシアのブルシのデモと同じところに、世界各地で
人びとがストリートに出て抗議行動をしました。これも
フェイスブックで連絡しあったほとんど関係のない人
たちが行なっています。ブルシ3.0のときには、クアラ
 Lumpur だけでデモが行なわれたのではなく、国内
外を合わせて約80都市で同時多発的にデモが起
こりました。

なぜこうした運動が成功したのかという、この社会
運動がマレーシア人に対して違ったもの見方を提供
したことがあります。選挙制度改革であり、これまで
のエスニック・ポリティクスではないということです。
その効果が、先ほど申し上げた野党間合意にも表
れているし、非エスニック問題ということでもあるし、
一気に政権を倒すのではなく、「選挙不正の改革」、つ
まり手続き論として闘うということをフレーミングと
してブルシ運動は提供するわけです(資料41)。

とくにブルシ2.0では非党派ということを前面に出
しました。ここで、党派間の対立に倦んだ若者たちの
心を掴みました。あるいは、黄色のシャツをみんなが
着て共通意識をもちました。あるいは、とくにこれ
はグローバル・ブルシに典型的ですが、いろいろと
グローバル・ブルシの話を読んでみると、「マレーシ

ア人として誇りに思っている。このような運動が起
こって参加できたことがマレーシア人としてうれし
い」という話が出てきます。

■ 社会運動はマレーシアのなにを変えたのか — 市民社会の活性化と街頭政治の登場

ブルシを中心とする社会運動はマレーシア社会の
なにを変えたか。この選挙制度改革で出てきたもの
として、PRもある意味ではブルシの産物です。それ
から、まずは野党主導でブルシが出てきたのです
が、そのあとは、運動の運営委員会はすべて市民
社会のNGOで運営されています。つまり野党以外にも
市民社会が活性化し、多様化して、運動の担い手
になっていることが指摘できます。運動の戦術の
高度化があり、メディアの変化、とくにオンライン・
メディアの変化によって動員構造が変化している
ことも挙げられます。

2008年総選挙以降のマレーシア政治の分水嶺は、
社会運動、とくにブルシ運動との関連で言えば、
おそらく2011年のブルシ2.0デモのころだと思
います。

「デモをします」と言われたあと、1か月間さま
ざまなかたちで政府はデモを止めるために人び
とを散発的に逮捕したり、嫌がらせをしたり
しました。しかし、結局は失敗して、デモを起
こされてしまいました。しかも、捕まえられた
人も、PSM(マレーシア社会主義者党)の指
導者のような一部を除くと、逮捕されても即
日解放されるのです。「これならデモに出ても
だいじょうぶだ」と、政府の抑圧に対する恐怖
がブルシ2.0で大幅に下がったのです。「街頭
に出てもいいのだ」ということがマレーシア
人にかかなり大きく認識されたということです。

それから、この社会運動、とくにブルシ運
動は、実態はまだわかりませんが、とくに
一般の人びとに選挙違反がたくさんある
ことを認識させました。あるいは選挙
管理委員会はあてにならないということ
を、一般のマレーシア人がかかなり言う
ようになってきて

います。午前中の話で鈴木さんも「制度に対する信頼の失墜」を指摘されていましたが、そのようなものを高めるような役割がありました。

選挙後に起こった話ですが、政権交代が失敗したことで、フェイスブックの自分の写真のページを真っ黒にして抗議行動することが起こっています。

よく観察してみると、私の知る限り、フェイスブックなどの運動では、最初はこのように選挙不正の糾弾のようなことがあったのですが、徐々に「制度的な問題がある」ということ、午前中の話で言うところの「ゲリマンダリングがあるのだ」という話も出てきています。それが、今までの発表にもあったように、外に出てデモをするかたちにもなっています。

■「都市空間の政治」と「村落空間の政治」の分離と業績投票の可能性

最後に、私が2013年総選挙で考えたことを二点だけ挙げておきます。これは、2013年総選挙後のマレーシア政治のアジェンダでもあります。

一つ目は、もしかしたら、「二つのマレーシア」というべきものがマレーシアに現れつつあるのかなと考えています。つまり、反汚職、透明性を求めるような「都市空間の政治」という大きな政治と、身近な設備や施設の充実を求めるような、従来からBNが進めてきたような「村落空間の政治」とが分離しつつあるのではないかということです。

かつてのマレーシアは、エスニシティで簡単に分析できていたのですが、他の決定的に重要な対立軸が出てきているのではないかと。こうした「マレー／非マレー」、「ブミプトラ／非ブミプトラ」ではない、都市空間や村落空間の政治、社会的な分断が重要になってきているのではないかと。私自身は、こうした「都市空間」と「村落空間」の分断が、ほんとうにこれから顕著化するのに関心があります。

もう一つは、「業績投票」が見られるのではないかと考えています。とくにクダ州です。クダ州でPAS出身の州務大臣による州政権が「ノー」を突きつけられました。その一方で、スランゴール州は前回以上にPRが議席をとりました。政権交代は、連邦レベルでは次の選挙を待たなければいけないのですが、州レベルでは政権交代が現実化しています。そうすると、そこで行なわれる州政権のパフォーマンスが今後の評価の基準になるということが、新しく出てきた重要なアジェンダではないかと思っています。

質疑・討論

参加者

伊賀司(神戸大学)／加藤剛(総合地球環境学研究所)／金子芳樹(獨協大学)／鈴木絢女(福岡女子大学)／塩崎悠輝(同志社大学)／篠崎香織(北九州市立大学)／柴田直治(朝日新聞社)／鳥居高(明治大学)／西芳実(京都大学)／福島康博(東京外国語大学)／山本博之(京都大学司会)／鷲田任邦(東洋英和女学院大学)

西芳実 伊賀さんの発表資料「ブルシ運動はなぜ活性化したのか——動員構造の変化」(資料40)に関して、「動員のメディアの変化」に「新聞を直接読まず、フェイスブックのリンクで情報を得る人々の拡大」とありますが、この人たちはフェイスブックがないころは、なにからどうやって情報を得ていたのでしょうか。

■ ブログ、フェイスブックが登場する以前は有権者はなにから情報を得ていたのか

伊賀司 とくに若い世代は新聞を読まなくなっています。新聞のどのセクションを読まなくなったということではなくて、新聞自体を読まなくなっています。

前の世代はおそらく新聞を読んでいましたが、私が指摘したのは、私のまわりのいわゆる知識人たちも「新聞の偏向はひどい。前は新聞を読んでいたけれど、もう食指が動かない。それよりはオンラインの情報のほうが信頼できるし、いろいろ選択肢がある」と言っていることです。

フェイスブックだけでなく、オンライン・メディアでいうと「マレーシアキニ」、「マレーシア・インサイダー」など、さまざまなオンライン・メディアが2000年代以降に次々と出てきています。そういったものを読むようになってきています。

西 それは「いまどうなったか」ですね。フェイスブックが出てくる以前はなにからどうやって情報を得ていたのでしょうか。前から新聞を読んでなかったのかもしれないし、身近な人から情報を得て判断していたのかもしれないとか、いろいろなことが考えられると思うんですが。

伊賀 基本的に選択肢がなかったのが、テレビや新聞が多かったはずで。それ以外には野党系のメディアもあります。1990年代までは、「ハラカ」(Harakah)なども読まれていたと思います。もちろん、エスニシティによってかなり違うと考えられます。華語紙はつい最近まで、情報の偏向の度合いでは他のメディア